

教師の自己教育力に関する調査研究

—— 第4次調査結果の分析を中心にして ——

小山 悅司*・河野 昌晴*・赤木 恒雄*

加藤 研治**・別惣 淳二***・妹尾 純子****

*岡山理科大学

**大府東高等学校

***広島大学大学院

****加計学園研修室

(1993年9月30日 受理)

I はじめに 一研究の視点一

筆者らはこれまでに、教師の自己教育力に着目し、4回にわたって調査を実施してきた。自己教育力に着目した経緯については、本紀要23号B¹⁾にて詳述しているので省略し、ここでは一連の調査の目的や今回の4次調査（1993年調査）の意義を再確認しておきたい。

調査は、現職教師を対象にして、①自己教育力の内実を構造的に把握すること、②自己教育力の高低にかかわる要因を分析すること、③成長の契機の一端を明らかにすること、の3点を主要な目的として実施した（表1参照）。1次および2次調査の分析結果は本紀要25号B²⁾で、そして3次調査の分析結果は27号B³⁾でそれぞれ報告している。

1次調査（予備調査）と2次調査は、理工系私立大学である岡山理科大学出身の現職教師を対象としており、その分析結果は、開放制に基づく一般大学のみに特徴的な可能性もあり、教師集団全体として的一般性に乏しいとも考えられる。

そこで3次調査では、この点を多少なりとも補うために、さまざまな大学出身者から構成される教師集団の全般的な傾向を明らかにすることに重点を置いた。そのためには、本来ならば全国規模の調査が必要であるが、種々の制約もあり、まずは愛知県の現職教師に対象を限定して調査を実施した。

さらに今回実施した4次調査では、先行調査を補完すると同時に調査の精度を高めるために、以下の諸点を念頭に置いた。

すなわち、その1はこれまでの一連の調査で不足していた教員養成系学部・学科の卒業者に注目したことである。これによって、一般大学と教員養成系との両教員養成制度の比較検討が可能になるものと考えられる。その2は、これまでの調査では、対象者の比重が若年層や中堅層に置かれており、熟年層が不足していた。そこで、今回は熟年層教師のデータを補強するために50歳代教師を調査対象にしたことである。また、その3は、標本数

を増やして統計分析の精度を高めるために、全国規模の調査（調査対象者2,000名）を実施したことである。

本調査報告は、4次調査を中心にして、主要には、①因子分析による自己教育力の構造的把握、②自己教育力の経年的推移、③成長の契機についての自己形成史的分析、の3点について考察を加えるものである。なお、有効回答者のフェイス・シートを示したもののが表2である。

II 因子分析による自己教育力の構造的把握

ここでは、教師の自己教育力がどのような内実によって構成されているのかといった課題意識に基づいて、自己教育力を構成する因子構造の分析を試みた。具体的には、4次調査の「自己教育力の自己診断」によって得られた数値をもとに因子分析を行い、教師の自己教育力を構成する因子を抽出し、各因子別にみられる特徴や、自己教育力の因子構造等について分析検討を行った。

教師の自己教育力を測定する項目として、2次および3次調査の結果を踏まえながら、従来の56項目（内10項目はダミー項目）を整理して33項目（内6項目はダミー項目）を設定した。ダミー項目を除いた27項目について27×27項目間の相関行列を算出し、これを主因子法によって分析したところ、固有値 ≥ 1.0 を基準にして6因子が抽出された。なお、第VI因子までをバリマックス回転させた後の代表的な項目について、因子負荷量を整理したものが表3である（因子負荷行列等は省略している）。

抽出された6因子の命名を試みた結果、それぞれ、「生徒把握力」、「先見志向性」、「精神

表3 自己教育力の代表的項目と因子負荷量（バリマックス回転後）

設問番号	代 表 的 項 目	I	II	III	IV	V	VI
7	つねに生徒に声をかけるほうである。	.67					
2	積極的に生徒の間に入り、生徒から何かを学ぼうとしている。	.66					
8	保護者（父母）との連絡を欠かさぬよう努めている。	.62					
17	生徒の立場で物事を考え、生徒を観察し、生徒を知ろうと心がけている。	.58					
13	将来にわたっての研究テーマや学習課題をもっている。		.73				
31	自分の進むべき方向やなすべき事柄についての長期的展望をもっている。		.67				
29	現在の生活において、自分自身の目標とか夢と呼べるものもっている。		.65				
1	研究会や研究グループに自発的に参加している。		.62				
26	自信をもって指導にあたっている。			.75			
28	教育に対して自らの信念をもっている。			.70			
19	教師という職業に対する誇りをもっている。			.64			
27	ものの見方や考え方方が柔軟なほうである。				.73		
32	他の教師からの忠告や指導を素直に受け入れられるほうである。				.66		
24	自分の考え方や行動が批判されても腹を立てない。				.60		
4	同窓会や懇親会などには積極的に出席するようにしている。					.69	
14	同僚の先生と仕事が終って一緒に飲むなどインフォーマルなつき合いを好む。					.62	
3	教員といえども組織の一員であるという認識をもっている。					.54	
22	たまには自分をじっくり見つめ直す時間が欲しい。						.65
23	自分の弱さや欠点を直そうと心がけている。						.57
6	一日を振り返り反省するために、日記をつけるなどの機会を設けている。						.50

注) 因子負荷量が0.50以上を代表的項目として枠で囲んでいる。

的充実性」、「他者受容性」、「集団協調性」、「自己省察力」、と命名した。つぎに、これら6因子を命名した根拠について順次述べることにする。

① 「生徒把握力（I）」の因子

第I因子で高い因子負荷量を示す項目は、「つねに生徒に声をかけるほうである。」、「積極的に生徒の間に入り、生徒から何かを学ぼうとしている。」、「保護者（父母）との連絡を欠かさぬよう努めている。」、「生徒の立場で物事を考え、生徒を観察し、生徒を知ろうと心がけている。」などである。これらは、生徒の方向に眼を向けて、生徒の気持ちになって、生徒から何かを学ぼうとする項目であり、絶えず生徒を理解しようと心がけていることから、第I因子を「生徒把握力」の因子と命名した。

② 「先見志向性（II）」の因子

第II因子で高い因子負荷量を示す項目は、「将来にわたっての研究テーマや学習課題をもっている。」、「自分の進むべき方向やなすべき事柄についての長期的展望をもっている。」、「現在の生活において、自分自身の目標とか夢とよべるものもっている。」などである。これらは、日常の生活に埋没するのではなく、長い見通しを持った自己教育をめざすには目標意識や先見的なパースペクティブをもつ必要があることから、第II因子を「先見志向性」の因子と命名した。

③ 「精神的充実性（III）」の因子

第III因子で高い因子負荷量を示す項目は、「自信をもって指導にあたっている。」、「教育に対して自らの信念をもっている。」、「教師という職業に対して誇りをもっている。」などである。心理的に不安定で自信がないためにただ夢中で頑張るのではなく、適度な自信（過信ではない）と教師としての誇り、そしてそれに支えられた精神的な充実性が自己教育の基盤となることから、第III因子を「精神的充実性」の因子と命名した。

④ 「他者受容性（IV）」の因子

第IV因子で高い因子負荷量を示す項目は、「ものの見方や考え方が柔軟なほうである。」、「他の教師からの忠告や指導を素直に受け入れられるほうである。」、「自分の考え方や行動が批判されても腹を立てない。」などである。教師という職業は、年齢を経るにしたがって周囲から欠点を指摘される機会が乏しくなり、いわゆる「盲点の多い人間」になりがちである。そこで自分の殻に閉じこもることなく、他者からの客観的な忠告やアドバイスを謙虚に受け入れることが自己教育に不可欠なことから、第IV因子を「他者受容性」の因子と命名した。

⑤ 「集団協調性（V）」の因子

第V因子で高い因子負荷量を示す項目は、「同窓会や懇親会などには積極的に出席するようしている。」、「同僚の先生と仕事が終って一緒に飲んだりして、インフォーマルなつき合いをするほうである。」、「教員といえども組織の一員であるという認識をもっている。」などである。これらは、人と人とのつながりを重視したり、組織や集団の一員であること

を自覚するなど、集団内での協調性に関連していることから、第V因子を「集団協調性」の因子と命名した。

⑥ 「自己省察力（VI）」の因子

第VI因子で高い因子負荷量を示す項目は、「自分をじっくり見つめ直したい。」「自分の弱さや欠点を直そうと心がけている。」「一日を振り返り反省するために、日記をつけるなどの機会を設けている。」などである。これらは、自分自身を内省することによって、自己の人間としての欠点や苦悩を知りつつ、自分自身が望ましい方向へ近づくように働きかける態度や能力のことであるから、第VI因子を「自己省察力」の因子と命名した。

以上の結果に基づいて、自己教育力の高い教師が共通に具備していると考えられる特徴を列挙すれば以下のようになる。

- ① 現状に甘えることなく、時代の流れやニーズを敏感に察知し、常に先を見通した鋭い洞察力と探求心を有している。
- ② すぐれた教科指導力、生活指導力等に裏打ちされた教師としての自信と誇りを有している。
- ③ 不遜な態度で生徒に接することなく、生徒の立場で物事を理解する姿勢を有している。
- ④ 他者からのアドバイスや意見を受け入れたり、教員集団の一員としての自覚をもち、自分のこれまでの行為を内省的に振り返り、自分が設定した課題解決に努力している。これらの特徴を要約すれば、「日常に埋没することなく、生徒の立場から指導にあたるとともに、教師集団の一員としての自信と誇りを保ちつつ、絶えず前向きな姿勢で自己改革に努めている。」といった教師像が浮かんでくる。これは、教師教育の標榜すべき目標ともなる教師モデルのひとつといえよう。

III 自己教育力の経年的推移

教師の成長過程にみられる特徴を、養成期から現職期に至る連続体としてとらえることによって、マクロな視座から全体を通じて特に注目すべき特徴を整理してみたい。

まず、自己教育力の高低が、教職生活を経るにしたがって推移する態様を概観してみたい。そのために、個々の教師のたどってきたライフ・コースの各時点における自己教育力の平均得点を算出し、近似曲線で描いたのが、図1である。図の横軸は、学生時代から現在の教職生活に至るまでの時系列的側面を1年単位に区分している。また、縦軸は、各時点でプロットされた自己教育力得点の平均値を示しており、1（非常に低い）から7（非常に高い）までの7段階に区分している。なお、参考までに2次および3次調査で得られた近似曲線を示しているが、いずれもほぼ同様にω（オメガ）型のラインを描いている。

この図から、以下の諸点が指摘できよう。まず、大学生活の半ばで平均得点が急激に低下し、卒業を待つと同時に次第に上昇へと向かう。その後、入職する機を得ることでピー

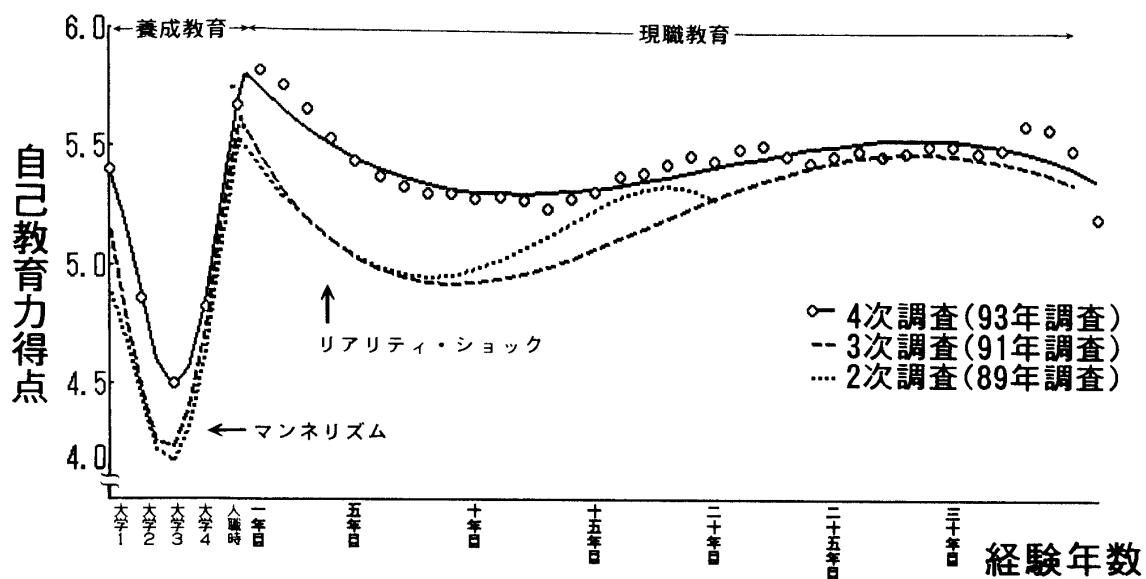


図1 自己教育力の経年的推移 (ω ライン)

クに達している。しかし、入職後3～5年目で急激に下降し、その後10年目前後にかけて低迷期が続き、やがて15年目前後から緩やかに上昇し、比較的安定した時期に入っている。

以上のことから、次の3つの時期が、教師の成長過程全体を通じて注目すべき危機的な時期 (critical period) となろう。すなわち、その1は、大学時代の中期に「大学生活への慣れやマンネリ化」によって訪れる自己教育力（勉学意欲）の低下である。その2は、入職後3～5年目頃に自己教育力（モラール）が急激に下降するリアリティ・ショックの現象である。ちなみに女性の場合は、入職後5年目前後に出産・育児で教職との両立に悩むことによる低下がみられる傾向にある。またその3は、10年目前後に教職生活全体を通じて最も自己教育力が低下するが、これは教職生活への慣れからくるマンネリズムの現象である。なお、この時期は大部分の回答者が高校紛争を経験した時期であり、心身の疲労困ぱいによる低下もみられる。

以下においては、これらの3大隘路をめぐって、順次検討を試みてみよう。

① 養成教育におけるマンネリズム

大学入学時の生き生きした喜びや希望は、たとえば、「大学におけるすべてが新鮮であった。自主的・主体的に勉学にいそしめることに、大きな喜びを感じた。」、「大学入学、寮生活で先輩との交友がはじまり、すべてに意欲的であった。教職は、母の見果てぬ夢であり、家族の期待も大きかった。」などの意見に象徴されている。

ところが、逆に大学2、3年目には「マージャン・パチンコ・コンパなどにおぼれ、遊びにふけっていた。大学よりもアルバイトに夢中になっていた（2年）。」「大学3年頃に意欲に欠ける時期があったと思われる。これは大学生活に対する慣れからくるマンネリ化と言えるだろう（3年）。」などマンネリズムに陥るのである。そして、この現象の原因を探ると、「大学の教育内容が観念論ばかりで空虚さを感じ、教職から他の分野（実業界）へ

の転向を真剣に考えた(2年)。」、「大学の教養部における休講の多さと魅力のなさ。また、安保闘争の時代背景もあり意欲が低下した(3年)。」のように、大学の教育内容や教育課程に対する失望によって勉学意欲の低下がもたらされたとの意見が多数を占めていた。これに続いて、「大学1年間に教養単位をほとんど修得したため、目標を失った(1年)。」、「これといった目標もなく、同じことの繰り返しの毎日にあせるが、やる気が湧いてこなかった(2年)。」など、明確な目的・目標意識の欠如を指摘する意見もかなりみられる。

しかし卒業が近づけば、「教育実習でショックを受け、卒業前にはさすがに勉強をやる気になっていた(4年)。」、「卒論(エッセンシャル・オイルの熱分解)に全勢力を注ぎ、実験室に泊まり込みで充実した生活を送った(4年)。」のように、上昇するのである。

以上、養成教育におけるマンネリズムについて、その特徴を列挙してきたが、要するに入学してから卒業までの長きにわたる学生生活において、自己教育力(やる気)の有無によって、それこそ雲泥の差が大学教育の成果として現れるのである。この差は、人間としての成長にとって極めて大きいのである。したがって、大学における養成教育改革の要諦は、マンネリズムをいかに打ち破るか、この点に集約されるものと考えられる。

② 新任期におけるリアリティ・ショック

入職直後のリアリティ・ショックの現象については、「生きている生徒相手に授業やクラブ活動に全力投球、教職こそ我が天職の意識あり(入職1年目)。」「教職につくという夢が実現、若さを武器に生徒に接し、生活のすべてが学校に向いていた(入職1年目)。」との意見に代表されるように、新採時の喜びや希望に満ちた教職生活が始まる。

ところが、しばらくすると「理想と現実のギャップを知り自信をなくした。特に生徒の現実を目の当たりにして絶望した(入職3年目)。」「初任校で努力を重ねながら、教育のみでは解決できない問題点が見えてきて意欲が減退していった(入職3年目)。」「初めての職場が工業高校だったため、自己のもつ学校のイメージと大きな差があり、"自分は何をすべきか"と迷い、その後部活に活路を求めた(入職4年目)。」「教育の裏の実態を知るようになり、ばからしい気持ちや時には幻滅を感じることも多かった(入職4年目)。」などの記述にみられるように、大学教育と教育現場との余りにも大きなギャップのために、教職観が転換したり自信や意欲を失うリアリティ・ショックの状態に陥るのである。

そして、「教師は崇高なものと思っていたが、現実の教師像を見て落胆した(入職3年目)」のように教育現場の実態に苦悩したり、極端な場合には、「古くさい人間関係にがっかり、年配の先生に希望が見い出せない。夏休みに職業安定所へ行き、係の人に説教されて帰された(入職3年目)。」など、退職を真剣に考えたとする意見もみられる。

以上のように、新任期に特徴的にみられるのが、教職観が大きく変容するリアリティ・ショックの現象である。すなわちこれは、最初の教職経験数年間で、教育上の見解が理想主義から現実主義へ、リベラルから伝統的なものへと、多大な変容を遂げるという結果である。したがって、仮に養成教育で理想とする教師が養成されたとしても、最初の教職経

驗数年間で、教師の教育上の見解は、保守的になってしまうのである。

③ 入職後10年目前後におけるマンネリズム

「教師は10年勤めてもまだ半人前」といわれるが、この10年目前後は教職生活の1つの危機的な時期である。以下の記述にもみられるように、教職への慣れによってマンネリズムに陥るのである。すなわち、「若年のため発言の重みも乏しく、長期の同一校勤務のためか意欲は下降した（入職8年目）。」「進学校に転勤して一時意欲が向上したが、周囲の教員の無気力さに感化され教育公務員としての自覚を失い欠けていた（入職9年目）。」「同一校勤務10年を過ぎて、将来への展望も持てないままに何となく過ごしていた（入職10年目）。」「就職して10年目頃から、生徒の問題行動や学習意欲のなさに失望し、生徒指導や教材研究においてマンネリ化した（入職10年目）。」「公務と組合活動との板挟みにあい、やや挫折気味になり意欲が低下した（入職10年目）。」などの記述がマンネリズムを象徴している。ちなみにマンネリズムとは言えないが、この時期には、「昭和43年頃から高校生の政治活動も始まり、学校にも外部勢力が入り荒れてきた。一部活動家に扇動される生徒を見て失望した（入職10年目）」のような記述に代表されるように、学園紛争の解決に腐心したり苦悩することによって自己教育力の低下が見られる。

以上、入職10年目前後におけるマンネリズムについてその特徴を列挙した。この時期は、新任期のあらゆる意味での新鮮さもなくなり、授業・教材の研究及び生徒への対応などにも慣れ、また職場で重要な仕事も任されるまでに至らないために、自己教育力が低下したままの状態である。したがって、この時期、いかに教育研究意欲を持続させ得るかが、教師の大きな課題と考えられる。

これまで述べたことを要約すれば、養成教育におけるマンネリズムと、入職後に訪れるリアリティ・ショック、さらには入職後10年目前後におけるマンネリズムの現象は、我が国の教師教育制度におけるさまざまな問題点や矛盾を露呈したものといえよう。

IV 成長の契機についての自己形成史的分析

(1) 分析の視点

本節では、教師が教職生涯を通じて成長を遂げる際の契機にみられる特徴の一端を明らかにすることを意図している。すなわち、「教師はいつどのような契機（出来事）によって成長するのか」といった課題意識に基づいて、4次調査の「成長の契機となった出来事とその時期」を中心に分析を試みる。具体的には、自由記述によって得られた成長の契機となった出来事をまず頻度の高い順に分類し、つぎに大学時代から現在に至るまでのライフ・コース上にみられる特徴について考察を加えたい。

さて、設問の内容は「先生の過去を回想していただき、『あの時は一回り成長したな。』と思われるような成長の契機となった出来事はどのようなものだったでしょうか。」と尋ねており、重要度順に3つまで記入するように求めた。その代表的な記述例を一括して末尾

の付表1に掲載している。なお、それらの記述は、30年から40年近くの長期にわたる豊富な教育実践を通じて得られた貴重な実践記録である。いずれも教師（とりわけ若年教師）にとって示唆に富むものばかりであり、「どういう点に留意して生徒に接すべきか」、「同僚とどのようにつきあうべきか」など、長い教職生活のなかで力点を置くべき具体的場面を鮮明に浮き彫りにしている。

(2) 全体的考察

今回の調査において「成長の契機となった出来事とその時期」についての回答総数は1826件であり、先行調査の総数（2次調査759件、3次調査445件）に比べて多くの回答が得られた。今回の調査においても、先行調査と同様に6つのカテゴリーに分類した（表4参照）。また、自由記述の内容を分析した結果、カテゴリー内における分類項目として新たに「行政職となって」、「大学での講義」など11項目を付け加えた（付表1参照）。

今回の調査結果をカテゴリー別にみると、最も多いのは先行調査と同様に「②教育実践上の経験」（691件、37.8%）であった。やはり、今回の自由記述のなかにもみられるように「教師は生徒の心をどのようにつかんだのか」、「どのようにして信頼関係を築いていったのか」といった内容のものが数多くみられた。教師が単なる知識を一方的に伝えるティーチングマシンでは職業として成立し得ない。教師と生徒との間に信頼関係ができる初めてすばらしい教育活動が展開されることが理解できる。

(3) ライフ・ステージ別考察

今回の調査において、学生生活から教職生活に至るまでの過程（ライフ・コース）を5段階のライフ・ステージに区分した。すなわち、大学時代、新任期（1～3年目）、中堅前期（4～10年目）、中堅後期（11～20年目）、熟達期（21年目～）の5段階である。なお、先行調査ではライフ・ステージを6段階とし、新任期を新任前期（1年目）と新任後期（2～3年目）とに区分していたが、今回は調査対象者の経験年数が長いので一括して新任期とした。以下においては、各段階ごとにみられる特徴的な契機について考察を試みる。

[1] 大学時代

今回の調査では「教育実習」が1位となっている。「教育実習をした際、教えることの難

表4 4次調査のカテゴリー別回答数（上位3位）

N=1826

①大学時代等の経験	275	②教育実践上の経験	691	③人物からの影響	146
教育実習	90	学習指導上の経験	161	先輩教師の助言・励まし	59
ゼミでの卒業研究	47	問題生徒への対応	137	教師集団からの影響	42
恩師との出会い	32	日常の生徒との対応	129	学校外の出会い	27
④研修活動	189	⑤職務上の役割の変化	484	⑥個人および家庭生活	41
研修活動〔校外〕	67	主任等になって	151	子育て〔子女の誕生〕	17
研究論文・研究発表	57	転勤によって	88	人生観の変化	15
個人学習	30	校務分掌等を担当して	55	社会人時代	4

しさと自分の力の無さを痛感した。学ぼうとする生徒たちの真剣な眼差しと意欲に感動した。教職に就いて未来をになう生徒たちと共に学ぼうと決心した（大学4年）。」などの記述にみられるように、実際に教壇に立つことによって「教えることの難しさ」を肌で感じるとともに、生徒の素直な気持ちに心をうたれ、教科指導面でも人間的な面でも“頑張らねば”という気持ちが、教師の大きな成長の契機となっているといえよう。また、2位の「ゼミでの卒業研究」では、たとえば、「卒論のリハーサルが3年次に実施され、教授、助教授から大学院の先輩たち全員の前で研究発表をしたとき（教育学科）、いろいろと指導や批判を受け、学問の奥の深さを知った（大学4年）。」など、学問に対する姿勢を学び専攻科目に対する自信を身につけることによって、一步成長する姿がうかがえる。また3位は「恩師との出会い」であり、「N先生（H大学教育学部）の指導のすばらしさを目にするたびに、先生に一步でも近付きたいものだと決意した。とくにその話術のすばらしさ、教室の暖かい雰囲気作り等、今でも先生には到底足元にも及ばず、まだまだ未熟だと反省している（大学3年）。」などの記述のなかに「師」と仰ぐことのできる恩師の出現によって、その先生に一步でも近付いたいとして自らを高めようとする「成長の契機」をかいだることができる。

[2] 1～3年目（新任期）

この時期は教科指導において、「自分は理解しているのになぜ生徒はわからないのだ」という自分が理解していることと、相手にそれをわからせることのギャップに悩む時期である。とりわけ、学習意欲の乏しい学校や進学をあまり必要としない学校へ赴任した場合、自ら育ってきた学校との価値観の違いに戸惑いと不安を感じながらも、少しでも生徒に理解させるために必死になって教材研究、学習指導法の研究をすることが、後になって大きな成長の契機となっていることに気づくのである。たとえば、「新任教の生徒の学力が低く意欲も乏しかったので、いかに興味を持たせるか、わからせるかに苦労した。そのため、まず教材を自分のものとして消化するという努力をするようになった（入職1年目）。」「2～3年間は授業がうまくゆかず、がむしゃらに夜遅くまで勉強した。と同時に教職への魅力も強く感じ生きがいを見いだした（入職1年目）。」「自分で理解していても、それを生徒にわからせることの難しさを『教えることで学ぶ』ことができた。教材研究と指導方法の重要性を再認識した（入職3年目）。」などの記述によってその様子が理解できる。

[3] 4～10年目（中堅前期）

この時期の各調査の1位の項目をみてみると「問題生徒への対応」（4次調査）、「日常の生徒との接触」（3次調査）、「研修活動（校内）」となっている。4次調査で「問題生徒への対応」が上位にきた理由としては、その時代背景としての「高校紛争」に注目すべきである。すなわち、4次調査の回答者は昭和40年代に全国で吹き荒れた「高校紛争」時に真正面から生徒と対峙しその修羅場をくぐり抜けることによって、教師は一步成長したと述べている。たとえば、「全国的に大学紛争のあと高校紛争が起こり、校内民主化闘争が生徒

会、新聞部などの生徒を中心に行われ、毎日深夜まで討論、議論したこと。教師の任務の重大さを理解した（入職10年目）。」などの記述にその要因を知ることができる。また、学業不振の生徒、登校拒否の生徒、非行を繰り返す生徒、自殺未遂の生徒など、ともかくさまざまな問題を持った生徒に体当りでぶつかりその子どもたちと一緒にになって考え、苦しみ、自らの生活をかえりみず、ぼろぼろになりながらもその生徒たちを立ち直らせ、卒業させたとき教師としてのやり甲斐をしみじみと感じる、と述べられている。たとえば、「自分のクラスの一生徒が非行を犯し退学寸前の状態となったとき、担任である私の責任として自分の下宿先にその生徒を引き取り、生活を共にしながら立ち直らせる努力をしたとき（無事卒業し立派な社会人となった）（入職3・4年目）。」「不登校の生徒を毎朝家まで迎えにいった6ヶ月。早朝出勤は辛かったがこの方法で3、4人の生徒が登校できるようになった。生徒は不思議なほど変わるものだ（入職8年目）。」などの記述からも理解されよう。

[4] 11~20年目（中堅後期）

この時期は、「主任等になって」という項目にみられるように、役職等により教師、学年全体、学校を動かすことによって成長をする姿が浮かんでくる。たとえば、「初めての女性学年主任のとき、学年経営とクラス経営に取り組み問題が多いとされた生徒たちとすばらしい卒業式を作り、生徒を信頼し育てる重要性を学んだ（入職13年目）。」「進路指導主事となり多様な生徒の進路をいかに保障するか、家庭や地域の期待にいかにこたえるかと、真剣にその責任を感じその対応に取り組んだとき（入職20年目）。」などの記述がそれである。また、この時期、4次調査では3位に「行政職になって」という項目があがっている。これは、県等の教育委員会に配属となり全県下等の学校の指導的立場に立って指導するこ

表5 成長の契機 — ライフ・ステージ別分析 —

時 期	主な内容（上位3項目）	回答率(%)	0	5	10	15	20	25	30	(%)
大 学 時 代	①教育実習	32.7								
	②ゼミでの卒業研究	17.1								
	③恩師との出会い	11.6								
新 任 期 (1~3年目)	①学習指導上の経験	21.9								
	②日常の生徒との接触	13.8								
	③先輩からの助言や励まし	11.1								
中 堅 前 期 (4~10年目)	①問題生徒への対応	11.5								
	②日常の生徒との接触	9.8								
	③学習指導上の経験	7.7								
中 堅 後 期 (11~20年目)	①主任(主事等)を担当して	14.1								
	②研修活動(校外)	9.7								
	③行政職になって	8.7								
熟 達 期 (21年目~)	①主任(主事等)を担当して	31.3								
	②転勤によって	9.9								
	③管理職になって	8.6								

注) 回答率(%)は、各時期ごとに集計した数値を示す。

とにより、教育現場ではなかなか知ることのできない教育行政的側面を知ることが成長の契機となったことを示している。たとえば、「初めて行政的な職場に入ったとき教育にも新しい場があることを実感し、他県等への研修の機会も増え、いろいろな視点から考えるようになった（入職16年目）。」などの記述が散見できる。

[5] 21年目～(熟達期)

この時期の成長の契機となる出来事は、指導的立場に立って学校経営にかかわるなかで、学校目標実現のために努力したり、課題や問題等を解決していく過程で得られる。たとえば、「教務主任になったとき。校長の意を理解しそれを実現させるための調整等、組織を動かしていくことの難しさを知るとともにそれをやり遂げたとき自分なりの成長があった（入職21年目）。」「指導困難校に赴任し種々の問題行動、荒れに直面し学校安定化に生徒指導部長として悩み生徒理解に基づく生徒指導、教師集団のモラールの確立が最重要であると確信した（入職22年目）。」などの記述からその過程が読み取れる。また、この時期の「転勤」も特徴的な成長の契機となっている。たとえば、「進学校だけの勤務からはじめて僻地の学校に勤めてみて底辺の生徒の存在を知り自分の力の無さを悟るとともに教育観も変わった（入職22年目）。」の記述のように教育の価値観の変化が自らを成長させる契機となっていることもある。

なお、今回の調査で新たな項目として「管理職となって」を加えた。その記述のなかには、「校務運営の責任者として有言実行することの難しさ、組織体としての教育活動を行うことの重要性を知った（入職28年目）。」「初めて校長となりしかも新設校であったため自分の望む学校運営を行うことができたとき（入職28年目）。」「管理職として学校を運営していくとき、いろいろな先生方の長所を見つけそれを伸ばしていくことの大切さを知る（入職28年目）。」などのように、指導者としてのやり甲斐が成長の契機となっていることが察知できよう。

V おわりに

今回の4次調査について、これまでの考察を通じて得られた知見を、因子分析結果（第2節）、自己教育力の経年的推移（第3節）、成長の契機（第4節）の順に整理すれば、以下の諸点が指摘できる。

まず、因子分析の結果、「生徒把握力（I）」「先見志向性（II）」「精神的充実性（III）」「他者受容性（IV）」「集団協調性（V）」「自己省察力（VI）」と命名した6因子を抽出した。このことから、自己教育力の高い教師が共通に具備している条件は、(1)つねに生徒に声をかけるよう心がけるなどの「生徒把握力」、(2)自分自身の目標とか夢と呼べるものを持っていなどの「先見志向性」、(3)適度な自信と教師としての誇りをもっているなどの「精神的充実性」(4)周囲からの客観的な忠告やアドバイスを謙虚に受け入れるなどの「他者受容性」、(5)組織や集団の一員であることを自覚しているなどの「集団協調性」、(6)自分の弱さや欠点

を直そうと心がけるなどの「自己省察力」の6項目にまとめられよう。以上の6項目が、自己教育力の高い教師にみられる特徴であって、教師教育のめざすべき教師像を模索する際の指針となるものである。

つぎに、自己教育力の経年的推移を示したカーブ（図1）から明白なように、今回の4次調査では2次調査と3次調査に比較してゆるやかで平均得点も0.5ポイント程度上昇してはいるものの、一連の調査結果とほぼ同様なω型のカーブを描いている。このことは、教師の教職生涯にわたる成長過程を捉える上で、大学時代のマンネリズムと入職直後のリアリティ・ショックおよび入職後10年目前後のマンネリズムの現象が、3大隘路であることを示している。我が国における教師教育制度のこのような矛盾の解消が早急に望まれるのである。

一方、教師が教職生涯を通じて成長を遂げる際の契機にみられる特徴については、「成長の契機となった出来事とその時期」について得られた記述を分類した。その結果、つぎの6カテゴリー、すなわち、「大学時代等の経験」、「教育実践上の経験」、「人物からの影響」、「研修活動」、「職務上の役割の変化や転勤」、「個人および家庭生活」、に分類できた。以上の6カテゴリーの中で最も回答数が多かったのは、「教育実践上の経験」である。この結果は、以前から言われているように「教師は授業で勝負する」ということを如実にあらわしている。つまり、「教育実践上の経験」の中でも教科指導における教材研究や授業実践の工夫が教師の大きな成長の契機となっている。したがって、教師が成長を遂げるためには、日々の授業実践を中心として、生徒を見つめ、生徒に学ぶことによって、自己の在り方を厳しく問い合わせ直す姿勢が望まれるのである。

＜注および引用文献＞

- 1) 小山悦司、「教師のプロフェッショナル・グロースに関する研究—教師の自己教育力をめぐる—考察ー」「岡山理科大学紀要」、第23号B、昭和63年、115~132頁。
- 2) 小山悦司、河野昌晴、村島義彦、曾我雅比児、妹尾純子他、「教師の自己教育力に関する調査研究—成長の契機についての自己形成史的分析ー」、「岡山理科大学紀要」、第25号B、平成2年、117~138頁。なお、2次調査に関連した文献をつぎに示しておく。
 - ・小山悦司、河野昌晴、曾我雅比児、妹尾純子、「教師の自己教育力に関する調査研究—自己教育力の経年的推移をめぐる自己形成史的分析ー」、中国四国教育学会編、「教育学研究紀要」、第1部、第35号B、平成元年、231~242頁。
 - ・小山悦司、河野昌晴、「教師の自己教育力に関する調査研究—自己教育力をめぐる因子分析的考察ー」、「日本教育経営学会紀要」第32号、平成2年100~118頁。
- 3) 小山悦司、河野昌晴、村島義彦、曾我雅比児、赤木恒雄、加藤研治、妹尾純子、「教師の自己教育力に関する調査研究—第3次調査結果を中心にー」、「岡山理科大学紀要」、第27号B、平成4年、227~245頁。なお、3次調査に関連した文献をつぎに示しておく。
 - ・小山悦司、河野昌晴、赤木恒雄、加藤研治、「教師の自己教育力に関する調査研究—2次調査および3次調査の比較分析を中心にして」、中国四国教育学会編、「教育学研究紀要」第37卷、平成4年、339~349頁。
 - ・岡山理科大学国際教育研究会編、「教師の自己教育力に関する調査研究—愛知県調査報告ー」、平成4年。

付表1 成長の契機についての記述例

回答数	記述例	
①大学時代の経験 (a) 部(クラブ)活動 (b) 教育実習 (c) ゼミでの卒業研究 (d) 友人との出会い (e) 大学以前の経験 (f) 恩師との出会い	275 (23) (90) (47) (15) (16) (32)	<ul style="list-style-type: none"> ・クラブ活動で主将をつとめ、しかも4年次には全日本インカレを主催し準備から大会終了までのおよそ1年半、休む暇なく走り回った。(大学3, 4年) ・大学の初代ESSの部長となり、170名以上の会員の部を運営したとき。英語によるコミュニケーション能力と組織を動かす力を養う機会を得た。(大学4年) ・教育実習をした際、教えることの難しさと自分の力の無さを痛感した。学ぼうとする生徒たちの真剣な眼差しと意欲に感動した。教職について未来をになう生徒たちとともに学ぼうと決心した。(大学4年) ・2週間の泊り込みで、地元に根っこを下ろしている小学校教師に憧れの念を強く持たされた。農山村、漁村の辺地での教育実習が役に立ったと思う。(大学4年) ・教育実習時、教案の誤字をきびしく指摘され、高校の先生方の前で恥ずかしく思った。教師にとって日本語を正しく使うこと、字の間違いは絶対してはならないと感じた。(大学4年) ・小学校の教育実習で純真な児童に接し、立派な大人に成長していくための指導者のひとりとして、教師という職業に一層の魅力を感じた。(大学4年) ・卒論の提出が間に合いそうになくなって、白紙の原稿用紙を何枚か入れたまま製本に出してしまったとき、自分の計画性の無さを反省した。その後は、できるだけ見通しを持つようにしてきた。(大学4年) ・卒論研究の時期、1人で1人の恩師に6月から3月までお世話になった。研究室の早朝の掃除から、お茶汲み、実験器具の扱い方、論文(英、仏、独、伊、スペイン)の読み方、全てを指導していただいた。時に徹夜実験も共にしていただいた。これは現在も生きている。(大学4年) ・卒論のリハーサルが3年次に実施され、教授、助教授から大学院の先輩たち全員の前で研究発表をしたとき(教育学科)、いろいろと指導や批判を受け、学問の奥の深さを知った。(大学4年) ・卒論研究で未知の世界を探らねばならなくなり、努力と勉強の喜びそれに完了した時の自信を体得することができた。自分の専攻科目に対する自信を身につけることは絶対必要。(大学4年) ・意見の異なる者と徹底的に語り合うことができたこと。それ以前は「唯我独尊」的で、他人の言うことを馬鹿にする傾向が強かった。(大学1年) ・大学同学年で同専攻の人の中に常に一步も二歩も先に勉強している人がいた。自分で新しい専門分野の勉強をするきっかけになった。(大学3年) ・戦後外地より引き揚げて、家族が生活に困って頼るものは自分以外にないと思い知らされたとき。(小学6年頃) ・敗戦時の体験(昭和20年) ・N先生(H大教育学部)の指導のすばらしさを目にするたびに、先生に一步でも近付きたいものだと決意した。とくにその話術のすばらしさ、教室の暖かい雰囲気づくり等、今でも先生には到底足元にも及ばず、まだまだ未熟だと反省している。(大学3年より)

	回答数	記述例
(g) 大学での講義	(14)	<ul style="list-style-type: none"> • I 先生に「真理は相対的」だと教わったとき。それまでは、絶対的真理があると思っていた。(大学 1 年) • 教科教育学の T 先生が全く課外の時間に、自主参加のゼミを開いてくださった。大学入試問題を学生に選ばせて、いろいろな角度から解説してくださいました。(大学 4 年) • 卒論作成次、チーフターの教授の自宅に予告も無く訪れたとき、いろいろお世話いただき、食事までご馳走になり、また多くの書物を貸していただき、学究の人を直接目の当たりにした感を抱いた。(大学 3 年) • 大学入学後、哲学や経済学、法学をはじめ知識の詰め込みではなく、考える学問に接したこと。(大学 1 年) • 政治学の講義を受けて、世の中の動きがよく理解でき今までわからなかったことが氷解した。(大学 1 年)
(h) アルバイト（家庭教師）	(8)	<ul style="list-style-type: none"> • アルバイトで家庭教師をしたとき。自分で理解するのは易しいが、説明して理解させるのは難しいと感じた。(大学 3 年)
(i) 安保闘争を経験して	(8)	<ul style="list-style-type: none"> • 60年安保のころ寮に入り学生運動に触れた。学生が社会変革の原動力となろうとしていることに感動した。(大学 1 年) • 大学 1 年次の60年安保闘争との出会い。人間観、社会観に大きなインパクトを与えられた。(大学 1 年)
(j) その他	(22)	<ul style="list-style-type: none"> • 旅先で山の分校に泊めていただき、分校の先生と夜を徹して教育論を交えたこと。教育の道へ進む決意をした。(大学 3 年) • 大学卒業直前に発病し、手術の失敗、1 年間の入院生活で人生のどん底を味わった。以来、あの困難を越えてきたのだからという思いが、それからの人生の苦しいときの心の支えになっている。(大学 4 年) • 父の死により親の強さと愛を感じた。誰よりも多く生きようと思った。自分の人生を人の 2 倍にも 3 倍にも価する内容の深いものにしたいと思った。 • 教師の一言でどんなに生徒が傷つくかを知らされた。また、逆に一言の励ましでその生徒がやる気を起こし、社会に出て成功したことを知った。(入職後から現在) • 初任が山間の僻地であり、子供との接触も多く、素直な子供の心に触れるたび、自分にとっては天職であると思えた。(入職後 1 年目) • 生徒の実態を知るため夏休み40日間かけて、1 日に 2 ~ 3 人の家庭を訪問し、とくに父親などと話す機会が多くなったし、子供達も案外学校外の顔を見せてくれた。(入職後 4 年目) • 夢中でがむしゃらに生徒の中に入っていたこと。(入職後 8 年目) • 高校紛争の際、1 週間体育館で全生徒と対話集会をやり、生徒の想い、教員の想いをぶつけあい、紛糾、共感、感動を味わったこと。(入職後 6 年目) • 昭和43~45年の学園紛争の時代に高校にもその余波が伝わり、紛争が絶えなかったときにも、担任の教え子等、自分の教育方針や指導法について批判を受けなかった。このことで、自分自身の教育方針等が誤っていないという自信がついて現在に至っている。(入職後10年目) • 同僚が生徒のレベルまで下りて、対話を心がけていることを知ったとき、それまで自ら進んで生徒の中へ入っていこうとしなかった自分に気づいた。若いときは若いというだけで子どもから近付いてきていたが10年目ごろからそうならなくて悩んでいたから。(入職後10年目)
②教育実践上の経験	691	
(a) 日常の生徒との接触	(129)	

回答数	記述例
(b) 問題生徒への対応 (137)	<ul style="list-style-type: none"> • 私の学年の女生徒が自殺したとき、生徒が動搖し、あらぬわざが横行した。生徒全員を集め、生きるということ、死去した友達とのかかわりをといたとき、その後の生徒の態度が一変しうわさはぴたりと止まった。その時、生徒の基本的な人間的能力の高さに感服した。先生をやっていてよかったとしみじみ思った。(入職後16年目) • 国語の教員でありながら、県からミシガン州立大学に約100日間派遣され、研修の後帰国し、もとの任務についたところ、問題をかかえる生徒から「先生は変わった。目が親しみやすくなつた。」と告げられたとき。(入職後14年目) • 高校の学園紛争の時、生徒会顧問として苦労した。どんな危機に直面した時でも、生徒との信頼関係を大切にしたことが混乱を収拾することにつながった。また、どんな時にも自然体で生徒に接することの重要性を学んだ。(入職後14年目) • がむしゃらさがなくなって、とても人間的に優しくなって生徒が見えてきた。(入職後30年目) • 「先生はお嬢さんですね。私の気持ちなどわかりません。」と言われたショックで、生徒を指導する時、知ったかぶり、きれいごと、建前では指導できないことを思い知らされ、以来生徒に納得のいく指導を心がけ、私も汚れる、傷つくを信条としている。「それがあなたのため……」と言わないで、「先生ならこう思う、こうしてきた」と言うことについている。(入職後1年目) • 外国籍の生徒が問題を起こし、特別指導のため家庭訪問をしたとき、その生徒の生活実態に触れて、「今までの自分の考え方の甘さ」を痛感した。(入職後3年目) • 初めて担任したクラスに中学校時代に非行歴のある子があり、懸命に取り組んだつもりだったが、1年途中で再び非行を行い退学していった。自分の指導力の無さを実感するとともに、自分で取り組み解決しようとしていた自分の誤りを痛感した。(入職後3年目) • 自分のクラスの一一生徒が非行を犯し、退学寸前の状態になったとき、担任である私の責任として自分の下宿先にその生徒を引き取り、生活を共にしながら立ち直らせる努力をしたとき(無事卒業し立派な社会人となった)(入職後3、4年目) • 問題行動の多いクラスを担当して1年間苦労したが、その際、1人の生徒に「どうせ心の中では生徒を信用していないだろう」と言われ、「教育は相互信頼からはじまる」ことを表面的にではなく心底より痛感したとき。(入職後9年目) • 受持ちの女生徒が、自殺未遂をはかりその原因と対策を考えたとき。生徒を取り巻く環境を知ることの必要性など、学ぶことが多かった。(入職後5年目) • 全国的に大学紛争のあと高校紛争が起り、校内民主化闘争が、生徒会新聞部などの生徒を中心に行われ、毎日深夜まで討論、議論をしたこと。教師の任務の重大さを理解した。(入職後10年目) • クラスを持っていて、何度も何度も問題行動を起こす生徒と話していくうちに生徒が、「先生たすけて、どうしてこんなにバカなんかいね」と言って泣いたとき、何を言っていいのか、どういう言葉をかけたらいいか、出なかったときのつらさ。(入職後8年目)

回答数	記述例
(c) 部（クラブ）活動の指導 (75)	<ul style="list-style-type: none"> ・不登校の生徒を毎朝家まで迎えに行った6ヵ月。早朝出勤は辛かったたがこの方法で3、4人の生徒が登校できるようになった。生徒は不思議なほど変わるものだ。(入職後8年目) ・登校拒否の生徒に対し、なんとか登校させようとあれこれ策を凝らして失敗。「1年でも2年でも納得ゆくまで休みなさい、先生は待ってます。」と言って成功。(入職後12年目) ・教職歴30年のうち、学級担任を20年経験したが、これまでに一人の退学者を出した。その生徒は、家が貧しく2年の終り頃、退学を申し出た。生徒の家（学校から20km 山の中に入いる）で、両親を説得したが、遂に退学を撤回させることができなかった。自分の力の限界を感じた。しかし、今考えるとあと1年分の学資の面倒位みてやれなかつたかと悔やまれた。(入職後15年目) ・転勤3校目、担任生徒はじめての退学者を出す。退学願いを保護者へ届ける。この時の虚しさ、腹立たしさ、落込み非常に大。1年後どうにもならなかった別の生徒を、何とか助けて卒業延期ながら卒業させる。問題をおこしたり、できの悪い生徒に対する接し方に自信を持った。(入職後15年目) ・全国を吹き荒れていた校内暴力や、生徒の荒れに直面し、今まで築いてきた教育法や接し方は通用しなくなってしまった、体当りで生徒の中に飛び込んで行った。その中から、生徒の声、本音が聞けた。(入職後19年目) ・手におえない生徒を追い、話し合い、学校に呼び戻す努力を続け、卒業式を迎えたとき、「お世話になりました」の声が、生徒本人から発せられた時は感激した。(入職後30年目) ・生徒指導で悪のグループから担任の生徒を抜け出させた。1年間の接触で立ち直らせた。生徒指導の集大成と満足感を味わう。(入職後22年目) ・非行した生徒を担任として守り（退学反対）、遂に国立大医学部に合格させ、卒業式の日、父親と本人が級友や父母の前で泣いてお札を言ってくれたことが、生徒を見る目を変えさせてくれた。(入職後20年目) ・家庭不和がもとで親さえ見捨てていった男女さまざまの生徒と接して、彼らの礼儀正しさというか人情の厚さを感じた。(入職後21年目) ・それまで勝ったことのないクラブ（野球）において、小さな大会であったが、優勝させたことが、授業にも、学級経営にも大きな自信となり、それがまた、生徒、保護者から信頼の目で見られる好結果につながった。(入職後2年目) ・部活（バスケットボール）で初優勝の時、皆が泣いて私を取り囲んでくれた時。共に励むことの重要さを痛感した。(入職後3年目) ・新任時、体育は苦手であったのにサッカーチームの顧問に任命され、実技面でのマイナスを理論面で補強し、生徒と共に同じ立場で部活動を行い、中国大会に県代表として出場できたこと。(入職後1年目) ・クラブ指導において、先輩教師の助言をもらい他府県の活躍著しいクラブ活動を見学、顧問と話し合う機会を持った。そのとき、「技術うんぬんより、生徒と共に活動することだ」と言われ、これなら自分もできると積極的に取り組めるようになった。(入職後2・3年目) ・部活動（水泳部）で、生徒と真剣に取り組んで、全国大会で優勝したとき。(入職後6年目)

	回答数	記述例
(d) 学習指導上の経験	(161)	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒とクラブ活動（ボート）で寝食を共にする生活が続き、大きな成果をあげることができた。ど素人でも努力によって生徒が応えてくれることの喜びを満喫。（入職後6年目） ・つぶれかけていた部（バレー）を引き受け、少人数の1年生を3年計画で指導し、共に合宿したりして練習に励んだ（担任ではなかったが、全員結婚式に招待された。）（入職後16年目） ・生徒達が先生を国立競技場に連れて行くのだという合言葉のもとに練習に励み、全国高校サッカー選手権大会に出場し準決勝まで進み、国立競技場で試合をすることができた。（入職後13年目） ・祝日や日曜日も休まず、また平日は夜の10時頃まで、部活の指導をし、その結果県大会で団体5位、個人16位まで成績が上がり、先日その生徒の結婚式で祝辞を述べる機会を得た。指導する側の姿勢や熱意で生徒が変わることを痛感した。（入職後25年目） ・ビジョン（教育理念、構想）・パッション（熱中）・アクション（行動）が一致した野球部長時代に発行した「野球部だより」（600号まで）と学校変革の取り組みによって、自分がわかりはじめ（欠点も含め）自分が少し信じられるようになった。（入職後25年目） ・大学進学のため課外授業を一生懸命だが不安な思いでしていたとき生徒達から「あと1問あと1題やってください」といわれ、毎日のように予定時間を1時間以上もオーバーしてやったこと。（入職後3年目） ・いかにして自分の授業の中に集中させるか、自分自身であみ出したテクニックで授業するうちに子どもからも評価され自信につながり今日までできている。（入職後2年目） ・教材研究をいい加減に行い教室で立ち往生し、恥ずかしい思いを味わいそれに懲りて以後教材研究に意をもちいたこと。（入職後1年目） ・大学の専門の授業と高校の教科書は大幅な懸隔があり、毎日の授業をこなすためには相当の下調べ、資料の準備が必要、毎日必死に準備した。（入職後1年目） ・国公立大へ300人位毎年送り出す学校で、テスト、採点と息つく間もなく忙しく自分がティーチングマシンと化し生徒は成長し偉くなり、自分を切り売りして身が細る一方の状態にりつ然とした。（入職後5年目） ・専門科目（世界史）に関して読んだ著書、論文などで重要なところを、B6カードに抜き書きし、整理分類するようにしたこと。以後、現在まで続いており約1万4000枚ほどになり原稿執筆や研究発表のとき大いに役立っている。（入職後6年目） ・教材研究を時間をかけて行なった。夏休みの間に1年間分の教材プリントを何十枚も作成してゆとりをもって授業へのぞむことができた。（入職後5年目） ・生徒たちが放課後連日列をなして質問にきた。その数に情熱で対応した。（入職後5年目） ・教えることを理解させるため熱心になり過ぎて、できる生徒に目を向けがちであった。あるとき、その点を指摘されはっと気がついた。（入職後10年目） ・指導書執筆を依頼され、担当箇所の教材研究を徹底的にすることが要求された。久しぶりに1日1冊以上の読書をするなど、勉強したという思いをもって毎日を送った。（入職後15年目） ・英語の指導法においてS V O C Mを中心最小のルールで最大の理解をさせるテクニックを開発した。（入職後15年目）

回答数	記述例
(e) 卒業生を送り出して (45)	<ul style="list-style-type: none"> ・丁寧に分かり安く授業するよりも、テスト、テストで追いまくる方はるかに学力が向上することを体験して、生徒自身で勉強する時間の確保がいかに大事か分かった。(入職後28年目) ・入職後最初の卒業生を送りだし、2年後にクラス会をやったとき、大いに盛り上がったので「こんな喜びがあるのか」と、以後の学級経営に一層の意欲がわいた。(入職後5年目) ・最初に担任した生徒を卒業させたとき、本当に教師になってよかったですを実感した。また、その反面自己の力量不足も感じ奮闘もした。(入職後3年目) ・問題を持つ生徒を多く含んだ3年生のクラス担任をし、苦労の末とにかく全員卒業にこぎつけたこと。それなりの手応えがあってやり甲斐を感じた。(入職後3年目) ・卒業後、生徒の在学中の生活の実態を聞いていかに生徒が見えていないかを痛感した。(入職後15年目) ・卒業生との交わりが永く続くことは至上の宝物と感じます。(入職後35年目) ・在学中手を焼かせた生徒が卒業後10年目のクラス会でなつかしそうに学生時代を語ったとき、手に負えないほどの生徒でも社会に出ればこんなに変わらるのかと感激した。だめな生徒を見捨ててはならないことを実感した。
(f) 進路指導上の経験 (21)	<ul style="list-style-type: none"> ・3年のクラス担任の時、クラス内の生徒の進路志望が種々(国立大学、私立大学、短大、各種学校、就職というふうにすべての進路先にわたる)であったために、各方面について研究し対応することの必要性を感じた(入職後13年目) ・全校1500名ぐらいの進学校でほとんど全員進学という状況の中で、3年生の正担任をし、H大学への合格90~100名という結果が出たときの1年間の教科指導は、保護者、生徒から鍛えられた感がつよい。(入職後10年目) ・普通科高校での大学進学(進路指導)の指導において作戦がことごとくあたり、経験から生まれた自分なりの信念と理論が体系づけられてきて結果が出始め、興味が湧いてきて教師の喜びを感じ始めた頃。(入職後22年目)
(g) 学級経営上の経験 (78)	<ul style="list-style-type: none"> ・最初担任したクラスの生徒が自殺したとき、大ショックで人間が人間を育てるどころか相談にものる間もなかったことの悔しさと情けなさにうちのめされたが、クラスの生徒の心配りに励まされ立ち直ることができた。(入職後3年目) ・HRの話合いが混乱、自分勝手な意見が次々出されどんな結論が出るか不安であった。担任としてどうすべきか分からずおろおろするばかり。結果は、プラス思考の積極的なものであった。生徒への信頼ができた。(入職後1年目) ・不遇な子ども(家庭環境)を担任し、その子を中心とした学級経営がうまく行ってすばらしいクラスとなった。この喜びは何事にもかえがたいものであり、その後の教職生活にはずみがついた。(入職後3年目) ・病気で休職したときクラスの生徒達が次々と励ましに来てくれた。その時、「生徒達のために自分の一生を捧げたい」と感じた。(入職後2年目)

	回答数	記述例
(h) 同和教育を通して	(15)	<ul style="list-style-type: none"> • 学級通信を毎日発行し、生徒、親とのつながりを深くもつようになった。それとあわせて、文化祭の合唱コンクールに一丸となってとりくませ、クラスのまとまりを作り感動を共有することができた。(入職後6年目) • クラス経営で悩む。一度に6人の謹慎者を出し毎晩謹慎中の生徒宅を巡回、当時は現在と違って措置がきびしく1ヵ月が2人他の4人は2週間であった。7年目はクラスを締めすぎて生徒に反発されたが絶えず話し合い互いに信頼が生まれ卒業していった。現在まで文通しているのもこの学年が一番多い。(入職後7年目) • 初めてクラスを持ったとき、ある生徒の実状をそのまま保護者に伝えたところ、他の生徒に伝わって大変困った。それ以来上手に話すよう心がけている(入職後8年目) • 文化祭の発表でクラスの生徒が制限時間を無視しようとしたので断固制限時間内で中止させ、その後生徒より強い反発を受けたが、彼らの発散の言葉に忍耐強く静かに耳を傾ける。その後クラス運営もスムーズにいった。(入職後16年目) • 自己の力量を過信しクラスの生徒と対立して自分の教育力を根本から反省させられた。(入職後10年目) • 家庭訪問の重要性に気づき(クラスの状況が今一つだったので)放課後全員の生徒の所へ出かけた。生徒が学習に対し本気になったり成績面がぐっと上がった。(入職後20年目) • 子どもはほめられて成長する面が多い。まとまって力を合わせて卒業に向けて勉強したクラスができ、卒業後も何かにつけ交流している(入職後25年目)
(i) 教職観の変化	(15)	<ul style="list-style-type: none"> • 解放運動の盛り上がりと同時に、学校現場で具体的に生徒と取り組み始めた。最初のロングホームルームで「部落」問題をはじめて語ったときのあの緊張感は今も大切にしている。(入職後4年目) • 同和教育が進み自分の立場がはっきり認識できるようになりやっと生徒の姿が見えはじめた。(入職後10年目) • 入職後直後の安保、勤評闘争に参加し教育支配の状況の厳しさを知ったとき。(入職後2年目) • なんとなく気持ちの中に教育に対する信念というものがわいてきて生徒が自分の子どものように感じたり思えるようになってきて、すべての点で余裕がてきて楽しいと感じた。(入職後20年目)
(j) その他	(21)	<ul style="list-style-type: none"> • 障害を持つ生徒に取り組み健常者と共に生きることの大切さを知った。(入職後20年目) • 肢体不自由児の学校に移って保健体育だけでなくいろいろな科目を学習し、生徒の頑張る姿に自分も負けまいとしてやったこと。(入職後21年目)
③人物からの影響	146	
(a) 先輩教師からの助言や励まし	(59)	<ul style="list-style-type: none"> • 最初の赴任校の校長の教育に対する情熱にうたれた。(入職後1年目) • 仕事のうえで実際に無理であることを先輩の先生は黙って見守り無理であることが分かって初めて助言してくれた。(入職後1年目) • 責任は自分がとるから十分にやれという上司に出会ったとき。(入職後22年目)

	回答数	記述例
(b) 教師集団からの影響	(42)	<ul style="list-style-type: none"> ・先輩教師の多くの感銘深い話を聞き、その一つ一つが自分の考え方や行動に大きな影響を与えた。「君は生徒に何点つけたのか。」、「最高85点、最低32点です。」「君はそれほど差のある教育しかできないのか。」(入職後1年目) ・初任の頃先輩の先生方と酒を飲み交わし相談しながら指導を受け叱られ、また助けていただいて教師としての在り方、生き方を学んだ。(入職後1年目) ・仕事のノウハウもおぼえややマンネリズムに陥っていた自分を先輩の先生（当時50歳）が厳しくまたやさしく酒を飲みながら諭してくれたこと。目から鱗が落ちる思いであった。(入職後8年目) ・先輩教師から現象面や表面にあらわれた数字などだけで物事をとらえ判断してはいけない。背後にあるものをしっかりと見つめようと教えられたとき（入職後6年目） ・生涯の師と仰ぐべき上司（校長）とめぐり会えたことによって、学校経営の何たるか、生徒第一主義について学んだこと。(入職後6年目) ・学年主任の時に、校長から「生徒に教えるばかりではなく、先生にも教えるべき年になっているんだよ」と言われ自己鍛錬に一層努めるべきだと自覚した。(入職後15年目) ・先輩教師の生徒を大切にする教育実践を聞いたとき（テスト期間中は生徒に教室の掃除をさせないで先生が朝誰よりも早く来て一人で教室の掃除をし、きれいなところで気持ちよく生徒を迎えるなどの実践）(入職後10年目) ・学校が荒れたとき（校内暴力、器物破損等）生徒は教師の指導の違いに突っ込んでくる。このとき指導者である教師の意志統一の大切さを感じた。(入職後15年目) ・学校を何校か変わるたびに人間関係の難しさを感じたが、多くの人と語るたびに個人はグループのため、グループは個人のために尽くす必要があると思った。(入職後25年目) ・同和教育運動と組合運動が結びつき組合ファッショが横行。反発して立ち上がってはつぶされ、また立ち上がってはつぶされ繰り返しがあったが振り返ってみればその中に鍛えられていたのかと思う。(入職後18年目) ・3番目に勤務した学校での職員集団の民主的運営に驚き、まとまった職員集団が教育では大切であることを痛感した。(入職後15年目) ・教職につき組合に入りいろいろな闘争に加わり弾圧を受け、仲間の裏切りに合う中で信ずるものとそうでないものを見分ける目が養われ、自分の生き方を定めるようになったとき。(入職後20年目)
(c) 同僚からの影響	(18)	<ul style="list-style-type: none"> ・同僚の一人がノイローゼで自殺したとき、他人の痛みが、苦しみがわかる教師になりたいと強く感じた。(入職後6年目) ・とくに現在のK高校では良き同僚、先輩に恵まれた。それまでの一匹狼的存在を改めたこと。(入職後12年目) ・自分の授業に関する学習や対策を軽視し興味に傾倒し、他方生徒に迎合しつつ毎日をごまかして過ごしながら生徒を馬鹿にしきっている同僚を見て。(入職後25年目)
(d) 学校外の出会い	(27)	<ul style="list-style-type: none"> ・教育委員会事務局に入り異校種の先生や行政職の方々と接し、広い視野から物事を見る必要性を学び人間的な幅ができた。(入職後24年目) ・教職員組合の活動で全国的な情報を得ることのすばらしさと仲間の輪が広がったとき感激した。(入職後4年目)

	回答数	記述例
④研修活動	189	<ul style="list-style-type: none"> 生徒課長を7年やり、町の補導員、市役所の人達との交流が苦でなくなった。(入職後30年目)
(a) 研修活動(校内)	(11)	<ul style="list-style-type: none"> 学校とは組織化された教育機関だと再認識したことである。学校運営組織即ち校務分掌、学級担任の仕事内容について研究調査を行った。その結果、学校内がよく見えるようになり他の職員の任務もよく理解できた。(入職後10年目)
(b) 研修活動(校外)	(67)	<ul style="list-style-type: none"> 就職1年目中央の講習を受けに行き、大学で学んだことがいかに机上の空論であったが、また理論的なものを消化吸収していなかった自分に気づいた時。(入職後1年目) 教師生活8年目に内地留学(1年間)で現場を離れて研修したとき、自分の専門分野の研究ができ学習指導に対して自信がついた。(入職後8年目) 海外研修に参加し自分の専門教科の重要性を膚で感じた時。(入職後10年目) 民間サークルに出会い、生活指導の勉強をしたとき。(入職後12年目) 植生調査を通して環境保全の意義を知り行動してきたこと。(入職後12年目) 絶えず教科指導に関する学習と研修を積み10年になり15年なりが過ぎてなんとなく1人前になったと感じた。(入職後15年目) 長期自己研修による教育実践の検証と教育理論の再構築。(入職後20年目)
(c) 個人学習	(30)	<ul style="list-style-type: none"> 教育実践の結果をまとめ全国レベルの学会で報告し、手ごたえを感じたとき。(入職後8年目) 生徒指導の指定校となり5~6名のグループで2年間研究し発表できたとき。(入職後10年目) 雑誌に実践や見解を発表したのに対し、批判され誌上及び研究会で論争となったとき。(入職後12年目) 自分の専門分野を論文にまとめあげたときに、多忙な教職に追われながらも生きているあかしを持っているのだと感じたとき。(入職後25年目) 教科書中心の授業の繰り返しで、マンネリ感にとらわれていた頃、自主的な教科書研究会に参加して、毎月の研究会に出席するようになったとき(入職後7年目) 教師(同僚)数名で週1回勉強会を開く。資本論等を輪読するなど、今も勉強会を続けている。(入職後15年目) 研究サークルで自分の教科について指導方法や評価について研究し、教科全体の流れを自分のものとして体得できたとき。(入職後10年目)
(d) 研究論文・研究発表	(57)	
(e) 研究グループ	(24)	
⑤職務上の役割の変化	489	<ul style="list-style-type: none"> 対外的な世話(県高体連の役員として)をするなかで、一般社会人と接することで教師間、教育行政担当者とは異なる考え方、見方等を学ぶことができた。(入職後15年目) 39歳で当時としては一番若い組合の支部長をしたとき。十分な判断力などなかったが、必死さは通じたようでそれ以後生徒のことはレポートし学習するという仲間ができる、現在も続いている。(入職後17年目)

	回答数	記述例
(b) 新設校開設にたずさわって	(22)	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒指導研究会の事務局長をしたとき。(入職後25年目) ・同和教育の事務局を担当し大きな組織をまとめることにおいて。(入職19後年目) ・新設校開設当初の3年間は若さにまかせて毎日であったが新しいものを創る喜び、それが後に伝えられるということで本当にやりがいにある時期だった。(入職後5年目) ・新設校に赴任し10年間にわたり自分の教育方針(学校の方針と同じ)を貫いて生徒の成長(学校の教育力の伸長)が顕著であったとき。(入職後30年目) ・新設校開校準備係と新設校開校からの数年間の創造的職務に教員として生甲斐を十分に肌で感じた。(入職後25年目) ・卒業式の準備を一切自分のみで進行させたこと。(入職後3年目)
(c) 校務分掌等を担当して	(55)	<ul style="list-style-type: none"> ・生活指導の窓口の分掌にあたり多発する問題行動に精一杯対処指導し成果も得たこと。生徒を信頼するとともに問題行動が起こる前の根本的な対策の重要性を痛感した。(入職後22年目) ・学校全体の教育相談の責任者として初めてカウンセリング等の教育相談に取り組んだとき。生徒の登校拒否に関しての指導の難しさを痛感させられた。(入職後23年目)
(d) 転勤によって	(88)	<ul style="list-style-type: none"> ・新採後ローカルなんのんびりした普通科校からいきなり都市の進学トップ校に転勤となり徹底的に教材研究等勉強しなおしたとき。(入職後7年目) ・初任教3年での転勤(大規模進学校)同じ教科の中でも最も若い年齢、おまけに出産。あらゆることが勉強で子どもを持ったことにより生徒への愛情も深まり一日一日が真剣勝負の繰り返しだった。(入職後5年目) ・教科指導の中心の普通科から生活指導中心の農業科に転勤になったとき人間教育の難しさを芯から感じ、教師という袜を脱いで裸の交流をしたことで指導に幅がでた。(入職後10年目) ・進学校だけの勤務から、はじめて僻地の学校に勤めてみて底辺の生徒の存在を知り自分の力の無さを悟るとともに教育観も変わった。(入職後22年目) ・勤務年数が長くなったので毎年転勤の心積りはしていたが、異動は何の打診もなく全く突然言われた。自分のプライドを傷つけられたり、また自分の心の弱さを知ったりした1,2年であった。(入職後24年目)
(e) 担任となって	(34)	<ul style="list-style-type: none"> ・初めてのクラス担任のとき、家庭訪問をして家庭的に(経済的、環境的)恵まれていない生徒が非常に多いことを知ったとき教師は親の立場で生徒のことを考えてやる必要があることを知った。(入職後2年目) ・初めてクラス担任をもった時、もがき苦しみあせり等をへて5ヶ月目くらいから少しづつ生徒から信頼されていると思ったとき。(入職後1年目) ・やはり学校で実際に担任を持ったときは生徒の生活指導、学級運営、基礎学力の伸長で忙しい毎日を送ったが振り返れば自分でも成長していた。(入職後3年目)
(f) 管理職となって	(43)	<ul style="list-style-type: none"> ・校長になって組合交渉、研修会、講師等で決断の責任、責任ある講話等をする立場を経験したとき。(入職後30年目) ・校務運営の責任者として有言実行することの難しさ、組織体として教育活動を行うことの重要性を知った。(入職後28年目)

	回答数	記述例
(g) 行政職となって	(48)	<ul style="list-style-type: none"> • はじめて校長となりしかも新設校であったため自分の望む学校運営を行うことができたとき。(入職後28年目) • 教頭、校長として教育困難校に赴任し教師の意識改革に腐心したとき。(入職後30年目) • 管理職として学校を運営していくとき、いろいろな先生方の長所を見つけそれを伸ばしていくことの大切さを知る。(入職後28年目) • 教頭のとき、校長と教員間の隙間でさまざまな問題で悩んだとき学校組織の大切さを学び、同時に最も大切なのは人の心と心であることも学んだ(入職後25年目) • 学校現場を離れ教育センターの研究員となって教師向けの講座の企画運営、教育相談業務の経験をして物事を広い視野から眺められるようになった。(入職後15年目) • 初めて行政的な職場に入ったとき教育にも新しい場があることを実感し他県等への研修の機会も増え自分自身にとって大いにいろいろな視点から考えるようになった。(入職後16年目) • 県教育委員会の委員会に参加し教育改革の動きや教育行政への理解を深め広い視野を持つようになった。(入職後20年目)
(h) 主任(主事)等を担当して	(151)	<ul style="list-style-type: none"> • 30代前半にもかかわらず生徒指導部長に選出されしかもそのときに到来したいわゆる「高校紛争」を生徒との対話、本音で話をすることを目標に乗り切ったとき。(入職後10年目) • 進学主任となって初めてクラス担任を離れ教師間の連絡調整にあたったときの難しさ。生徒のことだけでなく他の教師との連携をいかに調整するかという新しい問題意識を持った。(入職後10年目) • 初めての女性学年主任の時、学年経営と学級経営に取り組み、問題が多いとされた生徒達とすばらしい卒業式を作り生徒を信頼し育てる重要性を学んだ(入職後13年目) • 同和教育主任として同和地区生徒や同和教育に真正面から取り組んだこと。小さい悩み、大きい悩みが感じ取れるようになった。(入職後20年目) • 指導困難校に赴任し種々の問題行動や荒れに直面し、学校安定化に生徒指導部長として悩み、生徒理解に基づく生徒指導、教師集団のモラールの確立が最重要であると確信した。(入職後22年目) • 進路指導主事となり多様な生徒の進路をいかに保障するか、家庭や地域の期待にいかにこたえるかと、真剣にその責任を感じその対応に取り組んだ(入職後20年目) • 教務主任になったとき。校長の意を理解しそれを実現させるための調整等、組織を動かしていくことの難しさを知るとともに、それをやり遂げたとき自分なりの成長があった。(入職後21年目) • 市中体連の理事長になり各学校の意見等集約していくなかで組織をまとめるの大変さを知った。(入職後15年目)
(i) その他	(12)	
⑥個人及び家庭生活	41	
(a) 子育てを通して (子女の誕生)	(17)	<ul style="list-style-type: none"> • わが子が小学校に入学し様々な場面で先生のお世話になる姿を見て、一人の親の先生に対する期待を身にもって感じるようになった。教員の責務を痛感することにもなった。(入職後10年目) • 高校生の親が「自分の子供に学校としてどのように接してどのように扱って欲しいのか」が、私が高校生の親になったとき初めて理解できた。(入職後20年目)

	回答数	記述例
(b) 人生観の変化	(15)	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもを出産し育児をしていくうちに「生徒の親御さん達はよくこんなに大きくなるまで育てられたなあ。」とその忍耐力と愛情に尊敬の気持ちをいただいた。(入職後8年目) ・大きな病気をして自らの教員生活の在り方、教師としての教育観をみなおすような機会をもつことができた。(入職後24年目) ・長男が虚弱児として生まれやがて長くは生きられないと告げられた後、妻とともに凝縮された家族生活を嘗みやがて悔いを残すことなく短い彼の生涯を見送ったとき。(入職後23年目) ・妻の突然の死により精神的にまいってしまったが、多くの仲間の暖かい励ましにより立ち直ることができたとき。(入職後18年目)
(c) 社会人時代	(4)	<ul style="list-style-type: none"> ・大学卒業後8年間一般企業で働いた経験は今の自分の考え方、生き方に大きく影響している。(入職後25年目)

A Survey on the Self-Educability of Teachers

—— A Report on the Fourth Survey conducted 1993 ——

Etsuji KOYAMA* · Masaharu KOHNO* · Tsuneo AKAGI*
Kenji KATÔ** · Junji BESSOU*** · Junko SENOO****

**Faculty of Liberal Arts and Science*

Okayama University of Science

***Oubu-Higashi Senior High School*

****Graduate School of Hiroshima University*

*****Department of Staff-training*

Kake Educational Institution

Ridai-cho 1-1, Okayama 700, JAPAN

(Received September 30, 1993)

The purpose of this survey is to clarify the mechanism of teachers' self-educability. We especially focused on the lifelong process of growth, because we think this process could be one of the key concepts to establish effective support plans for teachers' self-educability.

In this survey, we tried to collect the data by using a method of questionnaire survey. The questionnaire survey was to obtain sufficient data about the process of growth on their life-history. In January 1993, 789 teachers responded to this survey.

The responses to the questionnaire were analysed. Findings obtained by this survey are as follows:

- (1) As a result of factor analysis, we found, (I) students-oriented tendency, (II) consciousness for objects, (III) confidence & pride, (IV) acceptance from others, (V) group partnership, and (VI) desires of self-recognition.
- (2) Many answers (1826 items) were categorized into six groups. They were "experiences during university life", "experiences of educational practice", "influences from significant others", "activities of in-service teacher education", "taking higher positions", and "private and family life".
- (3) Of these six groups, "experiences of educational practice" marked the highest ratio (691 items), followed by "changing roles of schools" (484 items).